

夏の現場は熱中症に要注意！！

- ◆6月号の『あんぜん150号』でも『**熱中症**』を掲載しましたが、気象庁が発表（7/25付）した“3ヶ月予想（8～10月）”によると、この夏の平均気温は、平年並み又は高くなるとの予想がされています。
- ◆『**熱中症**』は気温が体温と同じ、もしくは超えると体温調整がうまく出来なくなり倒れ込む等の症状が現れるもので、最悪の場合には**死に至る事**もあります。また、気温30℃以下であっても、湿度が高いと汗が蒸発しにくくなるために、放熱が進まず、『**熱中症**』になることもあります。
- ◆【**熱中症にかかりやすい者**】と【**熱中症の予防対策**】の一例を紹介しますので、熱中症にならないように、十分に気をつけて、暑い夏を乗り切ってください。

【熱中症にかかりやすい者】

- ◇新規入場者
（暑さに慣れていない）
- ◇高齢者
（体力的に衰えがある）
- ◇体調不良者
（前日に深酒した者など）
- ◇肥満の者
（上がった体温が下がりにくい）
- ◇性格的に我慢強い、まじめ、引っ込み思案な者など
（体の異常を表に出さない）

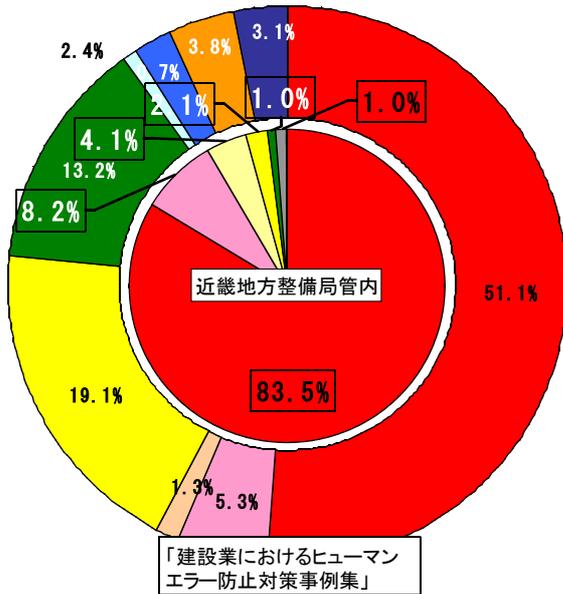


【熱中症の予防対策】

- ◇水分と塩分などミネラルの補給を15分～20分ごとに行う（スポーツドリンクなど）。
- ◇休憩を日陰などで定期的にとらせる。
- ◇衣服の素材は綿など、汗で濡れても肌に密着せず通気性の良いものを着用するよう指導する。
- ◇睡眠は充分にとるように指導する。
- ◇高齢者等については暑い環境下での作業を軽くする等の配慮を行う。
- ◇作業中、各作業員の顔色や発汗状態などをチェックし、声を掛ける。

事故の約50%は、ヒューマンエラーによるもの！

平成17年度 ヒューマンエラー要因別の構成比

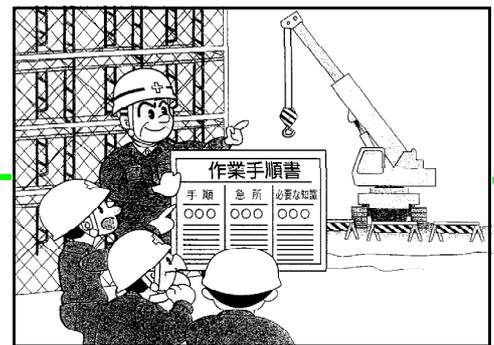


- 危険軽視、慣れ、悪習慣、集団欠陥
- 単調反復動作による意識レベルの低下
- 緊急時のあわて、パニック状態
- 近道本能、省略本能、能率本能
- 無知、未熟練、経験不足、教育不足
- 疾病、疲労、体質、急性中毒
- 場面行動本能
- 錯覚(外的、内的)
- 中高年齢者の機能低下

注)内円は、平成17年度の近畿地方整備局管内で発生したヒューマンエラーの事故について、要因別に分けた発生割合を示します。
注)外円は、(社)日本建設業団体連合会編纂「建設業におけるヒューマンエラー防止対策事例集」から、災害事例に基づくヒューマンエラーの要因別発生割合を示します。

- 内円の特徴として、平成17年度に近畿地方整備局管内で発生した事故の内、ヒューマンエラーの要因別の割合で最も多いのは、『**2：危険軽視、慣れ、悪習慣、集団欠陥**』で、全体の約8割を占めています。
- 外円の特徴として、災害事例に基づくヒューマンエラーの要因別の割合で最も多いのは、『**危険軽視、慣れ、悪習慣、集団欠陥**』で全体の約5割を占めています。
- 何処の工事及び建設現場等においても、**危険軽視等によるヒューマンエラーの割合がかなり多いことがわかります。**

- ◆事故は、災害事例に基づくヒューマンエラーの要因（9つに分類）がいくつか重なり合って、発生する場合がありますので、十分注意する必要があります。
 - ◆ヒューマンエラーの一つに、コミュニケーションエラー（安全指示がうまく伝わらない）もあります。
- 以下に**上手な安全指示をするための取り組み事例**を紹介します。



上手な安全指示をするための取り組み事例

- ◆指示の送り手である元請職員に求められていること。
 - ①指導力を高める。
 - ②作業内容、作業状況を事前に把握する。
- ◆指示の受け手である職長や作業員に求められていること。
 - ①安全意識を高める。
 - ②事前に作業内容を理解する。
- ◆指示の内容について、さまざまな工夫が必要。
 - ①文書、図面、マンガ等を活用する。
 - ②あいまいな指示をなくす。
 - ③マンネリを防止する。
 - ④事象事例を引用する。
 - ⑤ポイントを絞る。
- ◆指示の伝え方について、さまざまな工夫が必要。
 - ①直接、現場で指示する。
 - ②指示が一方向的にならないようにする。
 - ③繰り返し指示する。
 - ④打合せの仕方を工夫する。
- ◆フィードバック（現場での確認）が必要。
- ◆フィードフォワード（相手を知る）が必要。
 - ①相手に合わせて指示の内容を変える。
 - ②相手のことをよく理解する。
- ◆安全指示をスムーズに伝えるための現場の雰囲気づくりが必要。